天声人語

手紙を書くのに季節は無関係のはずだが、秋は人を、用もないのにその気にさせる。古くから、秋空に飛来する雁は懐かしい人の消息をもたらす使いとされてきた。〈九月のその初雁の使ひにも思ふ心は聞こえ来ぬかも〉と万葉集にもある▼「雁の使い」とは手紙のこと。中国の漢代、匈奴に囚われた武将の蘇武が雁の足に手紙を結んで国に知らせた故事にちなむ。それから長い時が流れ、メールが瞬時に地球を巡る時代である▼必然というべきか、手紙を書いたことのない若年者が増えているそうだ。郵便番号欄に電話番号を書くなど、基本を知らない小中学生が結構いる。去年の全国学力調査で、中3にはがきの宛名を書く問題が出され、正答率が74％だったと聞けば心配になってくる▼危機感を募らせる日本郵便は近年、教材を作って小中学校へのサポートを始めた。昨年度は全国約7900校で、165万人が授業を受けた。昨今は、先生も手紙を書いた経験が少ないのが実情らしい。親御さんもしかりだろう▼メールでは心がこもらないなどと言う気はない。ただ、古来、手紙は人間のあらゆる喜怒哀楽を媒介してきた。肉筆でつづる手紙には、電子時代にも失せない存在感と役割があると思う▼そういえば石川啄木に、いかにも啄木らしい一首があったのを思い出す。〈誰が見ても／われをなつかしくなるごとき／長き手紙を書きたき夕〉。やはり季節は秋だろうか。メールの一斉送信では、懐かしさの情も中ぐらいになる。

2013・9・22